
陽のあたる場所

夜方

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

陽のあたる場所

【Nコード】

N3623S

【作者名】

夜方

【あらすじ】

あなたにとっての陽のあたる場所はどこですか？

彼の場合はxxxだそうです。

陽のあたる場所

その日はぼかぼかとした陽気だった。

立春はとうに過ぎたというのに、来週にも春分の日はやってくるというのに、ここしばらくそれらしきものぞかせず肌寒い日が続いていたから今日はようやく春らしい一日という事になる。

駅近くのコインパーキング、スムーズにそしてピッタリと白線の中央に、小学校からの腐れ縁たる友の運転する中古の軽自動車はバツクで停車する。

バイト代を頭金に購入したというその黒色のジープは普段から綺麗に乗っていたが、今日は特に内装もピカピカに磨きがかれているような気がした。

ドアを開け、車を降りる。

頂にさしかかりつつある太陽をなんとなく見上げた後で、中古ながらも自家用車のオーナーたる彼は、しがたい原付のオーナーではない俺にキーレスの施錠ボタンを押しながらこんな事を尋ねた。

「……なあお前にとっての陽のあたる場所ってどこだ？」

「なんだよ、その詩的でファジーな表現は？ さてはメランコリックな気分なわけか、ファニーなエピキュリアンを目指すって言うってたヤツがさ」

俺は環境も学力も大差ない、同じ大学へと通う学友へと軽口を叩く。

「そういうんじゃないけどさ、なんとなく、なんとなくだよ……まあ例えが悪かったか、それじゃお前が心から安らげる所は？ ならどうよ」

「お前にとってはどこだよ？」

「ってかお前、質問に質問で答えるってどうなのよ、失礼だぞっ」

「そもそもお前が例としての回答を挙げなきゃ、こつちとしては伝わりづらいだろ問題の意味がさ」

とりとめも意義もさしてない会話を続けながら街を往く。

平日だというのに街には人が多い。勤労従事者もさる事ながら、学生達にすれば春休み。そしてこのぽかぽか陽気だ。春を満喫するなら外に繰り出さなきゃ確かに損かもしれない。

信号待ちの群集の中にあつてしばしの沈黙、そしてうんうん唸っていた悪友がふいに口を開いた。とはいっても信号が赤から青へと変わり、スタートシグナルよろしく響いたメロディと、一斉に発進した群集の足音に掻き消されてしまったわけだが。

だから俺は「なんて？」と聞き返す。

旧友は勿体つけるように信号を渡りきって群集をやり過ごした後で、堂々と言った。

「俺にとつての陽のあたる場所はだな、トイレだ」

そして俺は当然の如く言つてやった。

「つてか、陽いあたってねえじゃん」

竹馬の友はそんなのわからんだる陽のあたるトイレだつてあるかもしれない、と念を押した上で話を続ける。

だから俺は、そんな全方位開放型のトイレなんて嫌だよ、つてかそれもう野外排泄だよとは言わずに聞いてやった。

「なんかさ落ち着くんだよトイレに入つてるとき、だから最近じゃ用をたすとかたさないとかじゃなくて、ただ長時間快適に過ごせるよう自宅のトイレをプライベートルームとして改造してんだ」

こいつしばらく家に遊びに行つてないうちにそんな事してたのかとほんの少しだけ浮かんだ驚愕を顔にも出さずに俺は「あっそ」と答える。

「で、結局お前の陽のあたる場所はよ？」

続けざま、話の流れで回ってきた質問に今度は俺が顔をしかめる番だった。

顎に手を添えたりなんかして一応考えてみる。足は自動操縦で一

定の歩幅に任せたままで。

すぐ脇を暖かい風が通り過ぎる。

気付けば既に駅の前まで辿り着いていた。今までは歩道を往く人か来る人かでしかなかった人の群れも駅の中ではより猥雑に動いている。

ちらと腕時計に目をやる。約束の時間は五分ほど前に過ぎてしまったから新幹線は既に到着した後だろう。

駅へと入ってすぐのご当地の歴史的人物、馬に乗った戦国武将の像のすぐ前。約束の場所に立つ。

駅の正面入り口が二階部にあたるここからは、コンコース部を上り三階部を渡り新幹線のプラットフォームへと至る。そちらの方まで行ってみようかと一瞬悩んだ後、ふいに浮かんだのは先程までの下らない問いかけ。

自分にとつての陽のあたる場所はどこか？

そしてまさにその瞬間、彼女の姿が見えた。コンコースを下るエスカレーターの上に。

いつも三人だった。

俺と彼と彼女。

だけど俺と彼女はいつの頃からか付き合い始めた。

それでも俺たちはいつも三人だった。

だけど彼女は県外の大学へと進学してしまった。

夢があるからと言われれば何もいえない未だ夢の無い俺。それは隣のコイツも一緒なわけで。

二人で彼女を見送った。あの日も今日と同じ春の暖かな日だった。

「少し華やいでみようと思うの」そう言って入学前に染めたハニーブラウンの髪色は俺の良く知る黒髪に戻っている。切り揃えられた前髪の下、俺たちに気付いた彼女の顔に笑みがさし、小さく手を振る。

夏休みも冬休みもバイトとサークル活動が忙しくて帰って来られ

なかつた彼女。

「俺も忙しいから……」下らない意地を張って会いに行かなかつた俺。

この一年、やり取りらしいやり取りは電話とメールだけ。俺たちは変わってしまったのだろうか？ 何かを失い、そして何かを手に入れて大人になってゆくのだろうか？

少しの不安。

それでも彼女はそこにいる。

たった二週間の春休み、なのに手提げのトロリーバッグと小柄な自身がすっぽり入ってしまうのではないかというくらいのリュックサックを背負って。

エスカレーターを降りきった後で、少し体勢を崩して転びそうになる危なっかしさは以前通りの俺が良く知る彼女の姿。

そして照れたように笑う。

不安は期待に塗り替えられていく。

人ごみの中、彼女にだけ一条の光がさして見えた、と言ったら大げさだろうか？

傍らで、親愛なる友が呟く。

「俺、先にトイレ寄ってくんよ」

俺は自分の陽のあたる場所目指して小さく、だがしっかりと走り出した。

終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3623s/>

陽のあたる場所

2011年4月11日01時25分発行